

## アルビレオの色：中原中也と宮沢賢治の作品に現れる銀河

涌 井 隆

中原中也の没後『全詩集』に収められた（嘗てはラムプを、とぼしていたものなんです）という詩は次のように始まる。

嘗てはラムプを、とぼしていたものなんです。  
今もう電灯のない所は殆どない  
電灯もないようなしずかな村に  
旅をしたいと僕は思うけれど  
却々それもむつかしいことなんです。

ああ、科学  
こいつが俺にはどうも気に食わぬ

科学を敵視するのは詩人にありがちなので大目に見るとして、電気に頼る生活様式の浸透が田舎からも暗い夜空を放逐してしまったのは事実だ。中也の時代から一世紀近く経た今では、日本のどこに行っても夜空が明るすぎて天の川を観ながら七夕を祝うところなどほとんどない。それでも織姫牽牛の伝説は生き残っているのだから、我々は「物語」の生命力に感銘を受けるべきなのだろうか？いやそうではなくて、天の川が見えない場所で七夕を祝うなど全く意味がないという自明なことにすら気づかなくなるほど、天の川など都会人にとってどうでもよくなってしまっているだけなのだろうと思う。要するに自然に対する感覚が麻痺している。中原中也は都会の詩人だ。しかし彼が生きていた頃にはまだ都会の夜空にも星が沢山見えた。故郷山口で見た星の記憶に頼っているだけかも知れないが彼の詩には星が沢山出てくる。

『全詩集』所収の「星とピエロ」から引用する。

何、あれはな、空に吊した銀紙じゃよ / かう、ボール紙を剪って、それに銀紙を張る、 / それを綱か何かで、空に吊し上げる、 / するとそれが夜になって、空の奥であのやうに / 光るのじゃ。分かったか、さもなければ空にあん

なものはないのじゃ

それあ学者共は、地球のほかにも地球があるなぞといふが / そんなことはみんなウソじゃ、銀河系なぞといふのもあれは / 女共の帯に銀紙を擦りつけたものに過ぎないのじゃ (中略)

見ればこそ腹も立つ、腹が立てば怒りたうなるわい / それを怒らいでジッと我慢してをれば、神秘だのと云ひたくなる / もともと神秘だのと云ふ連中は、例の八つ当たりも出来ぬ弱虫じゃで . . .

空の星が銀紙じゃないというても / 銀でないものが銀のやうに光はせぬ、青光りがするってか / それや青光りもするじゃろう、銀紙じゃからなう

これは道化のピエロが子供に語りかけているのだろうか。広大な銀河ですらサーカスの大道具小道具のように紙で出来ているのだと種明かしをしているのだろうか。好奇心旺盛な子供にサーカスの舞台裏を見せるように宇宙の裏舞台を見せようとするのは一体何故なのだろう。自分の存在の悲しさは銀紙に縮小されてしまってもいいかもしれないが宇宙をどうして同等に扱うのか。それにしても神秘を神秘のままにしておくのがどうして弱虫になるのだろうか。というように様々な疑問が出てくる。しかし、銀河が銀紙で出来ているという種明かしで子供を騙せるほど彼らは無邪気だとも思えないがどうだろうか。考えるに、このピエロは「幻影」(『文藝界』1936, 11月)に登場する中也の分身であるピエロなのかもしれない。「幻影」から部分的に引用する。

私の頭の中には、いつの頃からか、 / 薄命さうなピエロがひとり棲んでいて、  
 / それは、沙の服かなんかを着込んで、 / そして、月光を浴びているのでした。

ともすると、弱々しげな手付きをして、 / しきりと手真似をするのですが、 / その意味が、ついぞ通じたためしはなく、 / あはれげな、思いをさせるばかりでした。

このようなピエロなら子供に何を言っても通じないだろう。通じないと分かっているが、無理に主張を押し通そうとしている自分を自覚して哀れみすら感じているのかもしれない。加藤周一はそのような中也の二面性について、中也が作品において道化を演じたり、攻撃的になったりするのは、「彼の心のなかの「ピエロ」を外界から防ぐ必要が

あり、薄命の「ピエロ」を救う必要があったからである」と書いている。(p.292) 興味深い観察だ。

『全詩集』所収の「野卑時代」には次のような一節がある。

星は綺麗と、だれでも云ふが、 / それは大概、ウソでせう / 星を見るとき、  
人はガッカリ / 自分の卑小を、思い出すのだ / / 星を見るとき、愉快な人  
は / 今時滅多に、いるものではなく / 星を見るとき、愉快な人は / 今時、  
孤独であるかもしれぬ

中也の作品においては星はこのように都会人の心理を喚起するものとして現れる。彼の関心は都会に住む自分であって、星自体にはない。人間も星の一部であるとか、血液の中に含まれる鉄は実は超新星爆発が地球にもたらしたものであるとか、人間の孤独など宇宙的規模から見ると微々たるものであるとか、というような視点はない。星という広大な自然によって慰められることはなく、かえって孤独の自覚を強められてしまう。金子光晴は「中原中也とか宮沢賢治とかいう奴はかあいそうな奴の標本だ。」(p.222, 中沢けい・他)と書いているが、星にかこついた中也の方がどちらかというより可哀相だったかもしれない。

中原中也は数少ない良質な作品によって知られている詩人である。生前未発表の作品も収録された『全詩集』に目を通すと膨大な数の駄作が存在することがわかる。星を扱った作品で優れていると多くの読者が認めざるをえないのは、『山羊の歌』所収の「秋の夜空」だろう。最初の二連を引用する。

これはまあ、おにぎはしい、  
みんなてんでなことをいふ  
それでもつれぬみやびやさよ  
いづれ揃って夫人たち。  
下界は秋の夜といふに  
上天界のにぎはしさ。

すべすべしてゐる床の上、  
金のカンテラ点いてゐる。  
小さな頭、長い袈裟、  
椅子は一つもないのです。

下界は秋の夜といふに  
上天界のあかるさよ。

アマチュア天文家の間では秋の夜空は四季を通じて一番殺風景であることで知られている。水瓶座や山羊座の方向には小望遠鏡を向けても大して見栄えする天体はない（山羊座との関連で詩集を『山羊の歌』と名付けた訳ではないだろう。）しかし、下界では「秋」といえば寂しいというのが通り評判である。実際、日本詩歌の伝統では秋は寂しいという歌が腐るほどある。中はその伝統を踏襲して、下界は寂しい、しかし、上天界ではにぎやかなパーティをやってやがる、という一種妬みの気持ちを歌っていると考えてよい。皮肉っぽいトーンがそのような解釈を可能にする。

以上、中也の星を題材にした詩を見てきたが、すべてに共通するのは、詩人が星自体に関心を持っているというのではなく、自らの心境と関係付けてのみ星の夜空を見つめているという点である。寄物陳思の作品と言える。「ひとつのメルヘン」という作品が唯一例外かもしれない。最初の二連を引く。

秋の夜は、はるか彼方に、  
小石ばかりの、河原があって、  
それに陽は、さらさらと  
さらさらと射してゐるのであります。

陽といっても、まるで矽石かなにかのやうで、  
非常な個体の粉末のやうで  
さればこそ、さらさらと  
かすかな音を立ててもゐるのでした。

## 2

宮沢賢治の弟清六はその著書『兄のトランク』巻頭のエッセーに兄賢治と一緒に岩手山を登った時の経験について書いている。

暮れかかった秋空が兄の好きな鋼青の色に澄んで、星が一度に美しく光り出した。「どうだ。この空の色は。あの星の光はどうだ。」と兄も急に元気になった。間もなく柳沢という部落の黄いろなランプのついた小さな宿について、（中略）やがて二時半ころに起こされて、寒さがたがたふるえながら、わらじをはい

て、いちめんの星空のしたをまっ黒な雲につつまれた山に向かって歩いた。その晩の星空の美しかったこと、全くもう凄いという外なかった、(中略)しばらく歩いて星空のよく見える広場に出たとき、兄はうやうやしく合掌して大きな声で開經の偈をと念えたのであった。

都会人中原中也と違って宮沢賢治は自然を知っていた。電灯ではなくランプを使用する村落が多く存在する地方に住み積極的に自然に触れた。自然科学の教養も深かった。彼が生前に発表した唯一の詩集『春と修羅』は様々な意味で読者に衝撃を与えたが、その最大の理由は、読者を都会の屋内から田舎の屋外に連れ出したことに尽きると思われる。

わたくしはずいぶんすばやく汽車からおりた / そのために雲がぎらっとひか  
ったくらいだ、 , , , これから五里もあるくのだし / くらかけ山の下のあたり  
で / ゆっくり時間もほしいのだ / あすこなら空気もひどく明瞭で . .  
(「小岩井農場」)

「雲がぎらっとひかる」とは賢治一流の巧みな表現だ。直観的に情景が浮かんでくる。ここに見られるような自然の中での解放感、口語の使用によってより強められている解放感はそれまでの日本語の詩になかったものだ。たしかに『春と修羅』の序に見られるような超現実的な言葉の使い方は1920年代としては前衛的で読者を驚かせたかもしれないが、宮沢賢治の本当の新しさは彼が花鳥風月ではない本物の自然を歌う詩人であったことにある。

### 3

光害の影響を受けない場所で満天の空を見上げるとして、一番注意を引くのが銀河であることは疑いようがない。オリオン座だとか北斗七星だとかカシオペアだとか言う人もいるかもしれないが、そういう人は肉眼で7等級の星が見えるような本当に暗い空の下では星の数が多過ぎて星座を辿るのが容易でないということを知らないのかもしれない。宮沢賢治はそのような空を知っていたから彼の作品には銀河がよく出てくる。

しらしらと銀河わたれるかしはばら火をもて行けど馬も馳せこず (大正6年5月)

あたらしい星雲を燃やせ / こんや銀河と森とのまつり / アンドロメダもかが

りにゆすれ(「原体剣舞連」)

銀河や太陽 気圏などよばれたせかいの , , ,(「永訣の朝」)

銀河ステーションの遠方シグナルもけさはまっ赤に澱んでいます(「冬と銀河ステーション」)

夜通し銀河の南のはじが / 白く光って爆発したり(「この森を通りぬければ」)

よもすがら南十字へながれる水よ / はるかなマジェランの星雲へとどけておくれ(「薙露青」)

素敵に灼きをかけられてよく研かれた鋼鉄製の天の野原に銀河の水は音なく流れ、鋼玉の小砂利も光り岸の砂も一つぶづつ数えられたのです。(「インドラの網」)

花巻のある東北からは南十字は見えない。マジェラン星雲も見えない。しかし北の空から見える銀河を南に辿っていくと南十字に行き着くことを星図を見て知っていた宮沢賢治は想像力を駆使して「銀河鉄道の夜」という童話を作り出した。

「銀河鉄道の夜」は童話の体裁をとっており子供から大人までの読者を想定しているので読者によって幅広い解釈が成り立つはずだ。北十字や南十字を前にして乗客がお祈りを始めるし、ジョバンニは「天上どころじゃない、どこでも勝手にあるける通行券」を携え、世の中の不幸な人達を救済する義務感を持っているから、作家賢治が苦悩した宗教的テーマが物語の根幹に座っているのは間違いない。しかし、この物語には解決も何もありません。ジョバンニの親友であるカムパネルラが溺死するところで唐突に終わってしまうからだ。ジョバンニは悲嘆にくれてキリスト教か日蓮宗に入信するのだろうか。日蓮宗の優越性を確信していた賢治はキリスト教的救済と日蓮宗的救済の対決を意図していたのだろうか。このような疑問に答えることは重要かもしれないが、この文章の意図するところではない。実際、「銀河鉄道の夜」という中編幻想童話は奇妙な現象に満ち溢れていて科学的論理的説明を追及しても徒勞に終わるだけだ。作家賢治の宗教観が色濃く出ていることは間違いないが解釈をそれに限定することは作品をつまらなくしてしまう。

#### 4

「銀河鉄道の夜」にはアルビレオという愛称で呼ばれている二重星が登場する。5センチくらいの口径の望遠鏡でも20倍ほどの倍率をかければ簡単に分解しかつ色の対比が美しいのでアマチュア天文家向けの入門書に広く紹介されている。もう少し大きめの8センチ20倍程度の双眼鏡を使って銀河を観望するとケフェウス座のデルタ星のようなア

ルビレオに優るとも劣らない二重星（しかも変光星）が存在することに気づく。色の対比の美しさという点では双眼鏡で銀河を流すと実に様々な色の星が目につくので別に特筆するに足りない。口径と倍率を上げていくとそれに応じてより離角の小さい二重星が現れるからアルビレオが有名なのは白鳥座のベータ星（ちょうど嘴にあたる）であることに由来しているに違いない。

アルビレオの呼称については諸説あるが、Kunitzschによればアラビア語とヨーロッパ語の間に音訳・翻訳されていくうちに何が何だかわからなくなってしまったものようだ。彼は1899年に初版が出て、その後1963年にDover Publicationsから再版されて広く流布しているRichard Hinckley Allenの*Star-Names, Their Lore and Meaning*が誤解を増幅していると批判している。

Kunitzschの*Short guide*によるとアルビレオの呼称はプトレマイオスが白鳥座につけたΟρνις(鳥)に遡るがそれを音訳したアラビア語のテキストを中世の学者がラテン語訳する際にギリシャ語の語源に顧慮せず音訳してしまったためにireus(ハーブの一種)という全く頓珍漢な言葉が登場した。その後*Almagest*(プトレマイオスの著作)のラテン語版にこの言葉が白鳥座ベータ星を指す言葉と間違えて記載され、挙げ句の果てにはアラビア語風に定冠詞の“L”が付け加えられab ireo(ab + ireusの奪格)がalbiroとなっただけでいい。このようにアルビレオという言葉の歴史をどう辿っても「白鳥の嘴」という意味は出てこない。

「銀河鉄道の夜」からアルビレオの記述を引用する。

「もうここらは白鳥区のおしまいです。ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観測所です。」

「窓の外、まるで花火でいっぱいのような、あまの川のまん中に、黒い大きな建物が四棟ばかり立って、その一つの平屋根の上に、眼もさめるような、青宝玉石(サファイア)と黄玉石(トパーズ)の大きな二つのすきとおった球が、輪になってしずかにくるくるとまわっていました。黄いろのがだんだん向こうへまわって行って、青い小さいのがこっちへ進んで来、間もなく二つのはじめは、重なり合って、きれいな緑いろの両面凸レンズのかたちをつくり、それもだんだん、まん中がふくらみ出して、とうとう青いのは、すっかりトパーズの正面に来ましたので、緑の中心と黄いろな明るい環とができました。それがまただんだん横へ外れて、前のレンズの形を逆に繰り返して、とうとうすっとはなれて、サファイアは向こうへめぐり、黄いろのはこっちへ進み、また丁度さっきのような風になりました。銀河の、かたちもなく音もない水にかこまれて、ほんと

うにその黒い測候所が、睡っているように、しずかによこたわったのです。  
「あれは、水の速さをはかる器械です。水も . . . .」鳥捕りが云いかけたとき、

作者賢治はアルビレオを連星と考えているようだ。トパーズ色の主星とサファイア色の副星がお互いのまわりを回っていて地球から観て両者が重なると色が合成されて緑色の光が見えると書いているように読める。その連星がどのようにして水の速さを計るのはよくわからないが、お互いの回りを回る周期性が何らかの方法で量を測定する役目を果たしているのだろう。銀河を水の流れと見立て、それがアルビレオという連星を水車のように回わす。その回転速度は銀河の水の流れの速さに比例しているはずだと想像したのかもしれない。

今日の天文学の観点からは些末な情報に過ぎないが、最近の調査ではアルビレオは実は連星（重力によってお互いの回りを回っている）ではなくて地球から観て見かけ上近くに見えるにすぎないことが分かっている。また主星がスペクトル解析でしか検出できない連星であることも分かっている（だから正確にいえば三重星。）アマチュア天文家にとってアルビレオが興味深いのはその色だ。アマチュア天文書を渉猟すると、様々な記述に出会う。主星が黄色で副星が青色としているのが多いが、トパーズ色、オレンジ色、サファイア色、などもある。副星を緑色あるいはエメラルド色としているものも散見される。

Patrick Moore というイギリスの著名なアマチュア天文家の著作を見ると、60年代に出版された *Astronomy* には、“yellow primary and a blueish-green companion” となっているが、80年代の *Exploring the Night Sky with Binoculars* には“golden yellow primary of magnitude 3.2 together with a blue companion of magnitude 5.4 ”となっている。60年代から80年代にかけて、Patrick Moore のアルビレオの色に関する考え方が変わったのが見て取れる。

日本のアマチュア天文の世界ではどうだろうか。英国人 Patrick Moore のように数多くのアマチュア天文学入門書を残した著述家を日本に探すと、野尻抱影と藤井旭が挙げられる。野尻（1885 - 1977）はすでに他界しており今日では影響力はないが60年代くらいまでよく読まれていた。藤井はまだ現役の天文写真家で彼の作品は世界的に知られている。オーストラリアに個人観測所を所有している。両者とも天文学の研究者ではない。野尻は英文学を専攻し、藤井は美術大学出身で漫画家としても知られている。Patrick Moore も天文学を正式に学んだわけではないので、三人ともアマチュア向けに書いたアマチュア天文家という点で共通している。

野尻の『星の神話・伝説』（昭和29年刊の『星座の話』に基づく）には次のような記述がある。



白鳥のくちばしのベータは、こと座のアルファと、わし座のアルファとをむすぶ直線の中央からすこし内側にある三等星、アルビレオ（くちばし）というつくしい名です。これは、小望遠鏡を向けても、金じきの星と、エメラルド色の五等星にわかれ、それが近ぢかとならんで輝いている、目もさめるような二重星です。（p.140）

藤井旭が70年代に出した『星座ガイドブック春夏編』も同様にエメラルド色となっている。

この星は小望遠鏡の好対象としていつもまっさきにとりあげられる美しい連星ですが、金色の3.1等星とエメラルド色の5.4等星が34'6へだててならんでいるようすをひと目見れば、誰でもその美しさのため息をつかずにはおれないことでしょう。（p.287）

上述したように、アルビレオはくちばしという意味ではないし、連星でもない。しかし、このような正確さは天文学的にあまり意味はないし、星の美しさを愛でるアマチュアにとっても意味はない。ただ、野尻と藤井のエメラルドという表現は興味深い。英語の様々な文献を漁ってみたが、サファイアという表現にはよく出くわすが、エメラルド色というのは見つからなかった。ちなみに、アラビア語の解釈に誤りが多いと、Kunitzschによって批判されている Richard Hinckley Allen の *Star Names*(1899刊, 1963再刊)には次のようにある（野尻が参照した西洋の種本が特定できないので比較的手に入れやすい19世紀の書物として挙げる。）

“Beta is one of the show objects of the sky, and Miss Clerke, calling its colors golden and azure, says that it presents ”perhaps the most lovely effect of colour in the heavens.””  
(p.196)

azure は緑と言うより青である。サファイア色と記述する文献が圧倒的に多いが、このように azure というのも散見される。藤井旭が野尻抱影を踏襲してエメラルド色と記述したのは間違いはないが、野尻のエメラルド色はどこから来たのだろうか。彼が参照したかもしれないRichard Allenがazureとしているのにどうして敢えてエメラルド色なのだろうか？残念ながらこの質問には決定的な答えはない。ただ、宮沢賢治の詩にエメラルド色の星が出てくるので次に引く。

こっちはいつか中岳が / 次のけむりを吐いてみて / その青じろい果肉のへり  
りで / 黄水晶とエメラルドとの / 花粉ぐらみの二つの星が / 童話のやう  
に婚約する (「北っぱのい星空に」新校本第三巻 p.255)

普通に緑と言えよいものを「エメラルド色」などと言うのはロマン主義の底流にある異国趣味なのだろう。英国やフランスからは宝石は掘り出せず、スパイスや毛皮と同じで植民地に求めるしかなかった。その帝国主義の拡張期と文芸のロマン主義は重なっている。今日詩を書く詩人は、エメラルド色の星などとは恥ずかしくてとても書けない。しかし、興味深いのは、今日でも、「星を見るのが好きです」というと条件反射的にロマンチックですねという人がかなりいることだ。私にはこれは全く理解できない。勿論星が美しいから空が暗いところに見に行く訳だが、その行為自体は登山のようなスポーツに近い。上に引いた中岳の「ひとつのメルヘン」という詩もそのようなロマン主義的な傾向を示しているように思う。銀河を河に見立てて「さらさらと流れている」と書けば「メルヘン」になるというのは、これはロマン主義以外にない。「ざぶざぶと流れている」と書けばアイロニーを読み取ろうとする読者が出てくるかもしれない。

## 5

肉眼で星を見る場合、その色に注意を向ける人は少ない。何故なら、光量が少ないので網膜の色彩感覚が十分に発揮できず、モノクロの諧調でしか捉えられないからだ。しかし、望遠鏡（双眼鏡）で見たり、写真撮影したりするとその色の鮮やかなことに誰もが気づく。中岳の詩に星の色の言及が無く、賢治の詩にあるのは賢治に望遠鏡を使った経験と天文学の知識があったのに中岳には無かったからだろう。では、同じアルビレオがどうして青色になったり緑色になったりするのか？

実は、ひとつのピッチに聞こえる器楽音に様々な波長の音が含まれているのと同じように、青色に見える星が青色の波長の光子のみを発しているかということそうではない。スペクトルを取ると他の色も混ざっている。要は、どの色が支配的であるか、網膜の感度がどの色に対して強いか、その他、諸々の要因が組み合わさって、目で見た時の星の色は決定される。地平線に近い太陽が橙に見えるのは、より厚い大気の層をくぐるため橙より波長の短い光がより多く（高度が高い時と較べて）拡散されるからだ。宇宙飛行士は太陽の色を白という。(Comins)

しかし、実は、望遠鏡を通して肉眼で見る星の色には他にも様々な要因がからんでいる。例えば、私の左目は乱視気味で近視も右目より進んでいる。しかし、どういう訳か

コントラストは右目より高い。そのためか、右目で黄色に見える星が、左目ではより濃く橙色に近くみえることがある。このように同一人物でも右目と左目で色の知覚が異なることがあるのだから、複数の個体の間で差が出るのは何も不思議ではない。加えて、望遠鏡の色収差、レンズのコーティングによる着色など、大気以外の要因も大きい。同一人物が同一の望遠鏡を覗く場合でも、体調によって色の見え方が違うのではないかという印象も否定できない。天文学者は星のスペクトルを取り分類している。青い星は赤い星より温度が高く年齢も若い。距離が分かればおればその見かけの光度から絶対光度が割り出せる。詩人はこのようなことは考えないかもしれないが星の色は貴重な情報源である。

中也や賢治が生きていた時代はアマチュア天文家にとって恵まれていた時代だと言える。都会でも夜空は十分に暗く、Percival Lowell(詩人 Amy Lowell の兄)のような裕福なアマチュアは大口径の望遠鏡を使い天文学の最先端に貢献することが出来た(火星の運河ではなく、系外銀河の発見)。現在では天文学は物理学の一部のようになり高度な数学を使いこなせないと理解できないものとなっているだけではなく、巨大望遠鏡と巨大加速器の助けを借りないと最先端に触れることが出来ない。1980年代半ばに物理学者ゲルマンが素粒子論と宇宙論が融合されたと宣言したことから分かるように、両者の融合は「学際的」などというようなものではなくてたまたま別々にやって来たが研究が進むにつれて同一の対象を扱う一つの学問領域だったということに関係者が気づいたという正真正銘の融合である。ただ、宇宙はべらぼうに大きくプロの天文学者が撮影した天文データをすべて自ら綿密に分析する時間がある訳ではないので、アマチュアが貢献できる部分がかかり残されている(ネット上に公開されているものも増えてきている。)それに最近は大口径の望遠鏡が比較的安く手に入るし、CCD カメラも性能が上がって来た。ただ、最先端の研究はプロに任せるしかない。

## 6

最後に、この文章を書くことになった経緯を書いておきたい。数年前のある晩、私は名古屋の明るい空の下 77mm 20倍の双眼鏡で夏の銀河を見ていた。そこで美しい二重星を「発見」したが、それがアルビレオであるとは知らなかった。後で星図で確かめ、藤井旭のガイドを読んでエメラルド色とトパーズ色の二重星であると納得した。実際、緑に見えたと、エメラルド色だと確信していた。そして、他の人も同じ色に見えるのだと何となく思っていた。山で出会った星見人もエメラルド色と言っていた。数カ月経って、今度は実家のかなり暗い空の下母親に見せるべく同じ双眼鏡をセットして彼女に色を訊いてみると薄青色という。確かに、エメラルドというよりアクアマリンに限りなく

近い色だった。それ以後別の場所で何度も見たが緑というより青という印象が強い。ネットの掲示板で質問してみても、回答は青というのが圧倒的に多かった。それはその後沢山のアマチュア天文書を調べて得た結果と符合する。そんな時、たまたま、賢治の「銀河鉄道の夜」を手にした。実は大昔学生の頃読んでいたのだが、アルビレオが出て来るとは知らなかった。多分、その頃星についての知識がそれ程ではなく読み流したのだろう。と言う訳で、この文章の発端は文学ではなくて天体である。実は、日本全域で本当に暗い空が得難くなった今日一体人は賢治の「銀河鉄道の夜」をどのように読んでいるのだろうと気に掛かる。

### 参考文献

- 大岡昇平など編 『中原中也全詩集』 角川書店 1972  
加藤周一編 『中原中也』 近代の詩人 十 潮出版社 1991  
鎌田東二 『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」精読』 岩波書店 2001  
中村稔編集 『宮沢賢治』 近代の詩人 八 潮出版社 1991  
宮沢清六 『兄のトランク』 筑摩書房 1987  
赤祖父哲二 『宮沢賢治一光の交響詩』 六興出版 h.1  
中沢けい・他 『群像日本の作家15 中原中也』 小学館 1991  
野尻抱影 『星の神話・伝説』 講談社学術文庫 1977  
宮沢賢治 訳ロジャー・パルバース 『英語で読む銀河鉄道の夜』 1996  
宮沢賢治 『校本宮沢賢治全集』 筑摩書房 1995  
Allen, Richard Hinckley *Star Names, Their Lore and meaning*, New York: Dover, 1963  
Comins, Neil F "Beyond the Pale" in *Astronomy*, May 2002  
Crossen & Tirion *Binocular "Astronomy"*, Richmond: Willman-Bell, Inc., 1992  
Ferris, Timothy *The Red Limit*, New York: Harper Collins, 1983  
Ferris, Timothy *Coming of Age in the Milky Way*, Anchor Books, 1989  
Kunitzsch, Paul *The Arabs and the Stars*, Northampton: Variorum Reprints, 1989  
Kunitzsch, Paul and Smart, Tim *Short guide to modern star names and their derivations*, Wiesbaden: Harrassowitz, 1986  
Moore, Patrick *Exploring the Night Sky with Binoculars*, Cambridge University Press, 1986  
Moore, Patrick *Astronomy* London: Oldbourne Book Co. Ltd., 1961 "